短歌

一隅に子供砂場と札掲げ貸農園の風は爽やか
南天の傍ら一人門火焚く植えたる人の面影と居て
杖つかず補聴器付けず百才の友年下の我を励ます

市川セイ

ギョーザは「中華にあらず」とギョーザ好き「コナモンだよ」と浪速の男
病膏肓いまや薬は食べるもの食事忘れても薬だけはと
歯の手入れ食わんがためは生きるため掘削研削トンネル工事

犬山俊昭
（慶短歌会・市民短歌会）

苦しさう眠れる顔の引きつれて何か言ひたきことのあるらし
老二人住む家に来し若きらが青春のにほひ残してゆけり
はみ出さぬ程度にありて老二人静かな暮し細き雨降る

今沢栄子

徳勝龍幕尻にいて優勝す近大マグロにまさる貫禄
コロナ禍の過ぎゆき見ゆるを喜べり人は群れつつ生きる動物
いまさらに奴隷商人らの銅像の撤去をするも差別の心

岩井　鉱治郎
（市民短歌会）

カーテンを上げた窓には満月が我が入る湯船に月影浮かぶ
みも知らぬ遍路路姿の我れを見て挨拶くれる四国の子供
孫が来て爺（じい）は遊びの相手して婆（ばあ）は食事の献立なやむ

植田　稔
（なぎさ短歌会）

住み慣れし町はいつしかビル街に駅で見知らぬ人等に埋もる
ビル街の僅かに残る草むらに巣づくこおろぎ声色（こわいろ）に鳴き
日溜りに寄せるねこの子うたた寝の深まる秋や冬毛濃（こま）やか

大澤　清水

あぢさゐの雨は藍色階（きざはし）のかたはらに咲く花を濡らせり（鎌倉・明月院）
白内障の手術を了へて病室の窓よりあふぐ夏空の青
コンビナートの側線にとまる貨車の列師走の雨に黒々沈む

太田　博
（市民短歌会・慶）

海へ行く電車に乗れば朝焼けがだんだんきみに近づいていく
歌うように川の名を言う我々は地下道を抜け海まで歩く
地下道を抜けてきみの住む街へひかり満ちる方向が海

奥田浩子

いろは坂もみじのトンネルくぐりつつ紅葉織りなす山々望む
菊花展金賞も無く銀賞も入場するも密なしマスク
子無き友逝きし知らせに花捧ぐ一代限りの墓前に在りて

加藤和彦
（なぎさ短歌会）

独りゐる厨に短歌書き留むる元旦の夜寂しさ淡々

「マリーゴールド」育てるパート懐しよ「あいみょん」の唄新鮮に聴く

老猫の瞳に映るは何なのか遠くを見るよな夢を見るよな

唐沢　小夜子

いにしえの香(かおり)ただよう静けさにピーンと糸張りコケ輝く

庭茂り陽をさし入れし植木切り殿様バッタバラの花中に

せせらぎと鳥のさえずり松林古都の荘厳一条恵観

木村　恵理

やわらかな赤子の泣く声届き来てしばし歩を止む夕ぐれの道

戻るとも戻らなくとも居ることに亡夫(つま)の机上にセントポリア咲く

咳きをマスクに包み歩く道だれも気付かぬ亡夫(つま)との会話

黒田　良子

（市民短歌会）

そばがらを陽に干す吾はいつのまに母と同じき事しておりぬ
五ヶ月ぶりの弁当を作り孫に会う僕も僕もとはしゃぎ食べおり
朝早く底冷えの中バスを待つ母の四十九日に心せかるる

小橋和子

コロナ禍お茶の稽古もオンラインに家元の講義に気分若やぐ
橙色のスーパームーンが出ていると孫耕平からラインが届く
厳しき残暑に萩・小菊など秋草を持ちくれし友と花寄したり

高橋美津子

早苗撫で風わたり来て水田に映り込む空、飛翔の小鷺
窓を開け六時の朝日に深呼吸stay homeの戦術たてる
水面下で足繁く漕ぐさま見せず君はひらりとテンペスト弾く

竹中亮子

漏れてくる光が徐々に膨らんで私の窓にも今日がはじまる
さりげなく妻の小さな手を取りて大病院の廊下ゆく人
カーテンの裾を揺らして陽の光そっと入りくる秋の気配に

田中依子
（なぎさ短歌会）

鳥羽の海に磯笛聞きし遠き日よ海女の写真に思いあふるる
ふるさとの長き錘の鳩時計螺子巻く父の背思い出しおり
子雀の鳴いてねだれば親雀代り番こに餌を遣るなり

田村孝子

貝殻に一つ絵を描き又一つ夢を描き居り独り楽しく
友達は「いらぬ・いらぬ」と同席の媼にこにこ焼そばを食む
歌を詠む時は「いつか（何時）」と問われても歌は魔法の如く時を選ばず

常保惠美子

見上げれば藤桜が舞う学び舎の姿が無くとも瞼閉じれば
大和路の桜を愛でに行かんとす吉野の山の華やぐ頃に
満開の桜を包む白雪はコロナを閉じる神の業かな

角田美香

無窮なる紺碧の空音もなく浮ぶ白雲ひとり和めり
絵手紙の塗り絵に夢中日常を解き放たれし熱きひととき
乳癌を温存術でコロナ禍の最中にありて命永らう

戸村忠子

夫(つま)逝きて知らない街に越して来て今日初めての古文書講座
目一杯おいしい空気吸ったよう古文書講座終えて帰れば
古文書は読めれば楽し読めなくばもっと楽しい謎解き字解き

中川節子

人生の一端が見ゆ白雲のゆるりゆるりと進み行きたり
天神のまりをつきたや子にかへりひいふーみーよーいつむーなー
さみしいなー早く天国行きたいなーところが急に目の検査あり

西田朝子

（御題「実」にちなんで）
あえかなる貴婦人愛でしライチの実眺むる我を大古に誘（いざな）う
（コロナに思う）
赤き領巾（ひれ）希（のぞ）みを託す我身かな流行（はや）り病にいざ立ち向かわん
（家内安全を願う）
拝殿に額づく我を案じ給う白い山茶花散りぬるを見る

野村小百合

人類の招きし地球温暖化おぞましきかな氷河崩るる
返り花垂るる藤棚の下に聞く認知症の友のその後の噂
放映の砂の大地の深き黙破りて庭にミンミンの鳴く

原　けい子
（慶短歌会・市民短歌会）

「いとしかるひとの心に憩いけり」とよみし人へとわれ嫁ぎたり
大寒や白菜刻みつ思い出す漬物上手の夫との朝餉
日曜日ポストのそばの草むらに待ちし封書のそのままにあり

広瀬　洋子
（なぎさ短歌会）

万葉の歌碑を尋ねて夫と行く萩のこぼるる山辺の道
いつよりか心に棲みしものが言ふ機会逃すな挑戦せよと
お洒落してどこへ行くのと問ふ孫に鏡の中から笑ふてみせる

見米　素子
（花舟湘南短歌会）

鬼は外声ひそめつつ福は内半世紀経てひとり豆まき
遠き代のふるさと偲び手を合わせ小菊供うる父の命日
プレハブのワンデーケイの浪江町を去る被災者は九年目の朝

森　睦子

天心のスーパームーンは明あかとコロナ禍の地球を浄めるごとし
花嫁のロングドレスを思はせるカラーリリイの流れるライン
話題性のなくなりし頃に初体験プチプチ歯ざわりタピオカミルク

山本　澄子
（市民短歌会）

看取られず遺言なくコロナに逝きし人遺骨となりて帰宅の口惜し
観客の喚声なき大相撲体当りの音のみ土俵に響く
七十路越えは声かけ見つめ助け合い二病息災の日を生く

横溝　由利子

◇市民短歌秋の大会記録

と　　き　令和二年十月二十五日(日)

ところ　藤沢市民会館　第二展示集会ホール

応募者数　三十三名(当日参加者　二十二名)

講　　演　千々和　久幸氏

(「香蘭短歌会」代表、現代歌人協会会員)

演　　題　「昨今の短歌から」

◎市長賞

ポテトサラダを口に入れやり車椅子の老母(はは)に頭を撫でられている　　阿部容子

◎市議会議長賞

コロナ禍も戦中戦後を耐えてきし老には耐ゆる強さ残れり　　早速美知子

◎教育委員会賞

楽しげに言葉を交す少年の足並み揃いわれを抜く夏　　岩井鉱治郎

◎市民短歌会賞

初盆に帰省できないコロナの夏大好きだったハトサブレ送る　　安西和芳

◎佳作賞

茂原敏子・山本澄子・池田佳子

令和二年四月二十六(日)「市民短歌春の大会」は新型コロナウイルス感染症の拡大防止を図るため来場・参加される皆様の安全を考慮し、中止となりました。